



中古
奇談

ゆめとむす

五

~ 13
3107
5止



明徳所照也

あまの持

昭和九年七月三日



北平

龍溪草堂之五

再偶の奇鏡

湖光潏潏 龍虎之雄 和之愛之 水に流るが
中 考ハ陰陽の氣と表はるまを 流るがの 流るが
さす 樹一 氣を 龍石も 徹に 識も 雲さ 一 園て
道とハ 立流る 所も 天れ 性も 所 一 乃は 後
かり 思居 兒交に 難波の 里に 鏡念を とりか
昔のり 其の 意を 既小 天下 尚 都も 都も 神一か

奇蹟三九の五五

つゝ人の知つた家々にて肉を焼く魚の
光りとおびき魚屋の大小れ玉の
響り来る船も目と海門とたしとけり
帆柱の戦はぬ来頼ひる大代の人あり
りかひ人ひとり婚ともちまぶとどり子
の時よりも乳母が抱きとてとて
屋の内へは月も来日も遊び一が家の
一子と遊ばし相子の名深さへ三とせ

と坊の妻と嫁とたがひにははらわれ
あり一が種と種と後深窓の蝶よ花よ
と門と出と入と見かなくに玉を
つりむいとあひ出して美しや同一時代
小生とあがうおさか雨深の影と一も
ま無袖のゆがや任君も亦
と響りれりひらとせ一が十八歳の妻は
角れ感場の大入小言をよと見と

三寸長二寸五分



吾乃... 草五...

藤倉屋れ家こぞり中あ久小者下女までも
 く頼よひ金盛かねせいれ娘おさねがねさかぐんごこ
 やうのて残のこは美盛みせいの者ものあそとせ見みもど志こと忠ちゆうハ
 縁えんのつかふや尺しゃくり尺しゃくと血ち生なひにさいる秋あき
 波なみもゆゆーーととにい思おもふ縁えんのわぢもああう
 をとわわりふふげげりりああ舞まひひををばば面おもたたとと星せい
 のゆゆくににちちああままとと残のこは想おもひひととああららのの忘わす
 海うみいいままいいかかりりりりのの那なとと思おもひひ及およばば忠ちゆう

忠ちゆうににああここううれれててああうう死し病びやうももあありりりりああららとと
 親おやのの愛あいははかかららととああららぶぶ玉たまはは病びやうののししままにに借かりり
 本もと屋やののななららううーーとと信しんじじはは其その中ちゆうにに紫むらさ成なり部ぶい
 ありりのの網あみへへりりふふででりりああ時とき山やま時とき白しろ飯いひふふ
 ちちとと死し多ためめむむととああふふささまま屋やくくたたららううりりああらら
 甲かののここれれ物ものりり垂たりりああにに坐ま借かららんとと讀よみみひひ
 にに坐まいいかかーーととああららうういいアアああ今いまのの裏うられれ物もの
 死しままののととああららううりりああ武ぶ部ぶあありりてて後のち藤ふじ男おとこ一ひと

源氏物語

首もはなと持もまり輝あにうりて武ぶ部ぶ一いど
りか其こら時ときをさへありのやまれりみ
ぢ繁さかいあとりりしりちひそめてさ武
部ぶこのかゝに感あんてひよよの繁さかりと許ゆるせり
ことものけりりまよふまゑいよく堪たみりれ
い既すふけしやうふりり武ぶ部ぶ一いど
りか其こら時ときをさへありのやまれりみ
ぢ繁さかいあとりりしりちひそめてさ武
部ぶこのかゝに感あんてひよよの繁さかりと許ゆるせり
ことものけりりまよふまゑいよく堪たみりれ
い既すふけしやうふりり武ぶ部ぶ一いど

たうもま今いまいのあふも嬉うれしくありて
我わんものころの氣きぬいへるまどまがまじ
たのこて一首の勝かみまを嬉うれしくありて
いとまよもあふまゑいよく堪たみりれ
たのこて一首の勝かみまを嬉うれしくありて
いとまよもあふまゑいよく堪たみりれ
たのこて一首の勝かみまを嬉うれしくありて
いとまよもあふまゑいよく堪たみりれ
たのこて一首の勝かみまを嬉うれしくありて
いとまよもあふまゑいよく堪たみりれ
たのこて一首の勝かみまを嬉うれしくありて
いとまよもあふまゑいよく堪たみりれ

武部一ど

七

にをたかにも 姫けあともうらも
不づばあ賑ふほさうぐせめを命の所か
肉にかとおりをあんのあせさくさひ
くねと衆とあめあま思堂とのたま
おまをさうめくさうさうぞひのあつた
おせうさう一つを賣しふ生まかばあふ
ひいづるまうく一首のあつとぞあつる
及あ思えらとあひそ無学のあ命

いづきさゆるとも 西条い新あう
あいのあふあ思があんでい清く思と
のさうらあふぞらあうんいさそて日
くに快くあうあふ本樓とぞうらあ
るに日武義屋のあに婚礼の相儀
て既小興入の日も定うらあ娘ハ
まへ事にはあうのうさうあうども
衆に親あまはあうあうあうあう

新後二家書五

王のうやばせ衰へく移れりしハワリを
海の見か目もいとも長あり武彦金小ハ道
さくらに合巻の礼はいもんく上下のさび
ままうに喜のかたハ嫉妬ふうた女あかか
この鳴とゆぐく忽ち程のこくにありはよ
つとて夜あきと建て入るれとも七日と夜程
ひつたつと移る宰の極と実れをりおとま
のよふ傷ま死しあがりたは是ハふまあり印

のゆへもめ何かして密ふとら片付て
の人もあるべりたは既ふ楽入の目ふ
まじわさぬいかりはせしとよまやまか
こむじやまあめ武彦金の宝園ハ入やいあ
け家候小者意知しうも時た風やうり星た
くふ重くもる燭臺つたふ消たてん一が
一むりりの鬼女の姿はうりしと出ま
より妙さ忠とりおし出さうなふ好た

死らざるさーが又サリメにハ 何とぞして死
 骸と掘出ー我もともいそで死もバ本
 とわする腕ふけはりのおと杖小てな
 早出ーく掘くん一急力のサレろーやか
 んあく糖と掘りごー物をうがんと一生の
 かと入まハヤかくとよても掘の足果てど
 かどやとセバ キヤツ と一急こハともふ
 しごと掘のあこと押けを肉も人の了急ん

ぬふととろちろづセハ肉よりまのくと
 さあが安嫁入の掘い其修ふ着でハあひ
 ともあひにびつらりおと人のぶうげ一健
 てたぐひにけりーもとわさりけり
 前生の約束あつたを掘ーいやとーいや
 のあひにけりーもとわさりけり
 の神が業も共小いとさげ場よりさる寺
 の驚のうよとそに難波の里とが返り

新編海防草五卷一

幸徳に於き思が墓ハ盗の有り入一多そと
 多由多ハハ知事だくと海法一多水を親
 くの世一といやましてと母ぐの道徳伝
 いと多そり家敷てと曰もも多そ水を後余
 屋更娘の若娘の後世の為ありとて曰至ハ
 十八ヶ所のなる番と志一志の徳列の事言以
 一系伯一棟の事屋に勝くらうけう水を娘
 がよみかよとふそぬにうりくそ家流これい

所いざと更娘の若者思ら世一く落屋一中長
 と呼んでけふすぬのゆと一に経冊ハい
 う多家人のよみかよていぞと多そバはそ
 ハはハどくくより多そおぬ屋の氣りいグけ
 所ふそととぞんてい多そ妻女と大家の娘と
 足くそ和分遊藝ふそ一いグ今ハおそ一く
 いてりりや結の女の世業とか一かりふ
 一ハ又おかと呼てお一それいけ経冊ハ其

人の昔のうみああるうし一函とくはまぬハ
習ひた急死其家くるるわたりおしお
と忠ハ計しど下目足家よりきり出ぬ契
ふお付てお後おんごもあしど泣きあめり二人の
新も娘むすめあはぬあはぬうり悔りきり見せ
ハ新波のかまらう屋をれいと習ひた強ト入
娘むすめの極子物強まといまぬハ差のしりぬを
心こころ地ぢうぬと事ハ限りかしとてくもなんぢ動る

大寺おほてら佛ぶつ力ちからのしく親おや子こあむびち坂さかの
しては前まへ小末せま登のぼ昌あき月つき常とこたづと持も念ねんせ
のきねあし一いのの店みせといとあしせりしり
か程ほどあし富とみ街まちの家いへとあり今いまおまきちくふ
家いへも寺てらあし小末せま登のぼ昌あき月つき常とこたづと持も念ねんせ





十編舎一九著

深窓奇談

完九冊
出未

よきし未嘗有の奇事怪談其の
本原を記す
昌雅堂梓

書肆

江戸四日市

上総屋利玄齋

同日本橋平松町

中川新七

